

《自主研究》

作品制作において「自分の気持ちに素直に沿った作品」となる為の一考察

宮田みな美*

A Consideration of How to be “Honestly in Line with My Feelings” in Art Work

Minami MIYATA

1. 目 的

本研究は、作品制作が自分の気持ちに素直に沿ったものとなるためにはどのような要因が重要となるかを考察するものである。

本当の意味で自分の気持ちに素直に沿った制作をするのであれば、作品制作の際には、普遍的「個性」を意識してそれを拠り所として制作をしていくのではなく、時には自分の輪郭を否定していくことが必要なのではないかと考えている。

2. 方 法

自分の気持ちに素直に沿った制作とはどのようなあり方が重要かを考察するに為、日々制作の中で感じたものを文章として保存していき、作品制作の途中過程の思考を記述することで、それらの中から本質が見えてくるのではないかと考え筆記記録に残す。

対象は2021年に開催した、あべのハルカス近鉄の個展に向けて制作をした約30点の作品である。

その際、自らの制作について記述することで制作の方法論を強固に裏付けて、作者にも制御できない無意識に表出したテキストが作者の意図によって縮減することのないよう、留意をする。

そのために、日々それぞれその時に感じたことを書いたものを後で並べて見返して、それらの文章の何らかの共通項の中から考察を行っていく。

3. 結 果

制作についての記述の抜粋その1:「冬の朝の冷たく澄んだ空気の中にある、凜と佇む花と花瓶を描きたいと思った。」

制作についての記述の抜粋その2:「母がフラワーアレンジメントで作ったピンクの花束を描きたいと思った。普段はアトリエにモチーフを置いて描くことが多いが、食卓で見ていたモチーフであったこともあり、暖かい優しい光が表現された作品となった。」

制作についての記述の抜粋その3:「エトルタは石灰質の断崖が続く海岸にあり、海は荒く泡立っていた。海はウォーターブルーやセルリアンブルー、ウルトラマリンを用いることが多いが、ビリジャンを使用することでエトルタの荒い海を表現することができたと思う。」

制作についての記述の抜粋その4:「オンフルールは天気がよく、海沿いで水の反射が眩しく、物や人が鮮やかで明るく発光して見えた。観光の町で、絵になりすぎる面もあるが、海と空と建物のバランスが美しい絵になる。賑やかで明るく鮮やかであることを明度と彩度の高い絵具を多用することで表現したが、慣れておらず絵をまとめることが難しかった。」

制作についての記述の抜粋その5:「喫茶店にある座布団の使われてきた重みまで表現したいと思った。」

制作についての記述の抜粋その6:「ドーヴィル・トゥルービルの砂は、細かく柔らかい。細かく柔らかい砂の色々な表情を描きたいと思った。ピュアレッドの混じったモノクロームチントウォーム、オーレオリンの混じったノクロームチントウォームを全体の様子を見ながら選択をすることで砂の色々な表情を描いた。」

制作についての記述の抜粋その7:「ガーベラは花持ちも良く、花卉や茎からも力強い印象を受ける。力強く鮮やかな様子をカドミウムレッドで表現した。」

4. 考 察

日々制作の中で感じたことを文章として保存していき、作品制作の途中過程の思考を記述することで、見えてきたのは制作における「観察」の重要性、即ち、深く見詰め感じるということの重要性についてである。

見慣れた歩道の風景を描いた作品も実際は、二度とない風景であり、その独自の美しさを捉えることに作家の独自性が生まれるのではなからうか。一般的に言って与えられているすべてのものには、それだけがもっている性質がある。

写真作品も、カメラを向けた対象を徹底的に観察することから始まり、作家が既にもっているものを捨て、観察力、いわば目力で対象の美しさを捉え、その捉えたところこそが作家の独自性を生むのではないかと考えた。

* 東京家政大学 (Tokyo Kasei University)

その観察力が作品の独創性であり、作家の本当に描きたかったものが現れるのではない。

2016年東京ステーションギャラリーにて開催された静物や風景を描き続けた画家、ジョルジョ・モランディ「終わりなき変奏¹⁾」の展覧会のテーマは「ヴァリエーション」であった。モランディは同じような瓶や壺を少しずつ組み替えて配置し、傍目にはわずかにしかない差で、静物を生涯にわたって描き続けている。

モランディの「ヴァリエーション」は、「繰り返し」とは違い、「モランディにとって伝統とは過去の繰り返しではなく、(略)自然を観察する毎日の経験の積み重ねへの献身であり、(略)これが、モランディ芸術にとって本質的に重要なことである。²⁾」とバベル・プレスジャネット・アブラモヴィッチが述べているように、制作とは観察する毎日の経験の積み重ねであり、モランディ芸術にとっても本質的に重要なことであるところでは述べられているのである。

そして、「モランディは、彼が書いたオブジェとしての物体に為したのと同じように、光と陰影に同等の重みを与えている。³⁾」と述べられているように、作品の中で光と陰影を分けたり、対象を静物・テーブル面・背景等と分けたりせずすべて等価な立場で扱われており、絵の具の厚み等も同じように描いている。これはモランディの観察する毎日の経験の積み重ねによって生まれた表現なのだと考える。

そして、医学における実験的方法を確立したクロード・ベルナルは「実験家は自然に向かって質問を発する。しかし一旦自然が語るが否や彼は沈黙しなければならぬ⁴⁾」として「観察が教えるところから従って何時でも自己の構想を放棄し、改定し、変更するだけの覚悟がなければならぬ」と述べているように、すべて或る対象、在る現象、或る問題、即ち一般的にいつて与えられているすべてのものには、それだけが持っている性質があると書かれている。作家が観察をし、その独自性を表現するためには、与えられているもの純粋な姿で捉える必要があり、我々がすでに持っているものを捨てなければならないのである。

制作が、自分の気持ちに素直に沿ったものとなる為には一貫するテーマを最初にあらかじめ自ら設け、それを抛り所として制作していくのではなく、与えられているものをその純粋な姿で捉え、我々がすでに持っているものを捨て、観察し、制作していく必要がある。

5. ま と め

制作において自分の気持ちに素直に沿ったものとなるために重要な要因とは、制作をする際に一貫するテーマを最初にあらかじめ自ら設け、それを抛り所として制作してい

くのではなく、我々がすでに持っているものを捨てて対象を観察し、「何を見て、どう作るか？」という、観察による自分なりの価値観を持って制作をしていくことが重要となると考えた。

「制作をする」という時、何を作るかは自由であるが、観察し、それをどう作るか、どのように作るかが重要であり、そこにはその人が世界をどう捉えているか、どう捉えようとしているか、どう考えているか、どう模索しているかが現れる。そこに自分の素直な気持ちが現れるのではない。

過去にも作家の観察がさまざまな描き方を生みだしてきたように我々がすでに持っているものを捨てて対象を観察し、どう考え、作りたい作品を作っていくかということが重要なのではなからうか。

6. 残された課題

本稿では、「制作において自分の気持ちに素直に沿ったものとなるためにはどのような要因が重要となるか」について考察をし、「観察」が重要な要因であることを指摘した。しかし、作品制作には「観察」の他にも様々な過程があり、その視点については検討を行うことができなかった。

さらに今後、造形活動が行われる学校教育の場で、子供が対象をよく観察し、考え、表現をしていくにはどのような指導が必要となるのかを考察していきたい。

文 献

- 1) 「ジョルジョ・モランディ—終わりなき変奏—」
- 2) バベル・プレスジャネット・アブラモヴィッチ (著), 杉田 侑司 (翻訳): 『ジョルジョ・モランディ—静謐の画家と激動の時代』(2008).
- 3) バベル・プレスジャネット・アブラモヴィッチ (著), 杉田 侑司 (翻訳): 『ジョルジョ・モランディ—静謐の画家と激動の時代』(2008).
- 4) クロードベルナル (著), 三浦岱栄 (訳): 『実験医学序説』岩波文庫 (1970).

参 考 文 献

- ・岡田温司 (著): 『モランディとその時代』人文書院 (2003).
- ・岡田温司 (著): 『ジョルジョ・モランディ—人と芸術』平凡社 (2011).
- ・沢瀉久敬 (著): 『個性について』レグルス文庫 (1994).
- ・佐々木正人 (著): 『新版アフォーダンス』岩波書店 (2015).
- ・林 央子 (著): 『つくる理由 暮らしからはじまる, ファッションとアート』DU BOOKS (2021).
- ・白尾隆太郎 (著), 三浦明範 (著): 『造形の基礎: アートに生きる. デザインを生きる.』武蔵野美術大学出版局 (2020).
- ・「芸術新潮05月号」新潮社 (2005).